

ナガサキが教えてくれたこと。

近藤 風香

高校2年生の冬、私の中で初めて、フィクションがノンフィクションになった。不自然にひらけた野原、溶けて原形もないガラスの瓶、粉々にされた石柱、映画やテレビでしか見たことのなかった光景が目飛びこんできた。

—ああ、これがナガサキか。これが、「戦争」か。—

胸を痛めずにはいられなかった。当時の映像を映し出すモニターからは悲痛な声が聞こえてくる。遠い地からほんの少し指を動かすだけで、一瞬にして何千、何万もの命を奪っていく核兵器。もう二度と使ってはいけない。ナガサキ以来、人々が必死に唱え続けてきた平和を壊してはいけない。この時、私は強く思った。

それが今、まさに同じことが起ころうとしている。ロシアとウクライナの対立である。反転攻勢を繰り広げるウクライナに対して、「核兵器を使えば、世界大戦を含む、あらゆる戦争はすぐに終わらせることができる。」とロシア側が発信したのだ。

1945年のあの恐怖が再び起ころうとしている。そんな現状に焦燥感をおぼえる。

どうしたら、この争いに終止符が打てるだろうか。ウクライナ ロシアではない。

平和と核の争いである。ある人は言う、「核はもつべきではない。核は世界を破壊するだけだ」と。しかし、またある人は「核兵器の存在は自国防衛の一環として必要だ」と述べた。その考えは1万2520発という地球上に存在する核の総数として強く表われている。このことは、現代社会が掲げる世界平和を、平和を壊すはずの脅威が世界平和達成の役割を担うという矛盾を生んでいる。

また、核兵器が壊していくのは人間に関わる話だけではない。この地球上には、175万種もの多種多様な生き物が存在している。哺乳類や、昆虫、植物、微生物たちが相互に関係をもちながら暮らしているのが、この青い星である。

そんな星を見下ろした宇宙飛行士はいつも、美しいと言った。

しかし、もし核兵器が放たれたなら、今の地球の美しさが一瞬にして失われてしまうのは明白なことだろう。

過去にアメリカが行った核実験により、今もその傷痕が残っている場所がある。

「ビキニ環礁」だ。1945年3月1日、アメリカ軍の水爆「ブラボー」は、広島に落とされた原爆の1000倍の破壊力で炸裂した。爆発によって砕けた珊瑚の粉塵はキノコ雲に吸い上げられ、放射能を帯びた「死の灰」となり、周辺の家や島々に降り積もった。誰もが名前は聞いたことがあるだろう、あの第五福竜丸もこの実験で被ばくし、乗組員23人のうち21人が死亡した。「ブラボー」によって作られた巨大なクレーターは核実験の脅威を象徴するものとして、2010年7月、世界遺産に登録された。

緑豊かな島々があっという間に消えてなくなった。元の姿に戻ることは、もう、ない。

私たち人間は、いつだって自然の力を借りながら生きてきた。それなのに、今、自然を壊しているのは他でもない私たち自身である。核兵器の使用によってこれ以上、自然破壊を進めていくというのなら、人類の滅亡は免れないことだろう。

本当に核をもつことが平和につながるのだろうか。他人を傷つけて手にした平和は、心の

底から私たちが笑って、安心して過ごせるものなのだろうか。私たちが望む平和はもっと身近なところにあるのではないのか。食べて、眠って、大切な人達と一緒に居られること。ただそれだけを望むのに、あと何人の命を犠牲にするつもりなのか。

ここで冒頭に戻ってみる。あの日、私がナガサキで感じたこと。現実で見た悲惨な光景。そして思ったこと。ただ、私が言いたいのは、核は平和のために必要ないということ。核兵器は私たちに何も与えない。ただ奪い、壊していくだけだ。